

原 登

M・サンドエル氏の特別講義

平成二十三年四月十六日深夜、ハーバード大学教授マイケル・サ
ンドエル氏の司会で「東日本大震災」に関して、日本、アメリカ、中
国（上海）の若者を中心に感想を述べ合う番組があった。日本以外
は衛星放送の参加であったが、それぞれ名門大学の優秀な学生だけ
にみな傾聴に値する意見を述べていた。続いて五月十五日には同じ
教授の司会で、「ハーバード大学からのメッセージ」として「この震
災は私たちを変えるか」と題して論じ合っていた。

客観を逸脱することなく博識に裏付けられたサンドエル氏の巧みな
話術の誘導は、視聴者を惹きつけた。導入は震災時の日本人に共通
した態度への指摘であった。一瞬にして全てを失った自失の中で
人々のとった行動を褒め称えるものであったのである。それは、悲
劇の渦中や明日の生活の不確実な状況にあっても社会秩序を乱すこ
となく、譲り合い、いたわり合い、人々が助け合う姿への賛辞であ
った。

サンドエル氏はこれをもとに学生諸子に意見を求め、地域の絆、倫
理、使命感、善意、日本人の精神性、など等、日本人があたりまえ
と考えていることに着目し、世界の目で分析してくれた。さらに、

この震災が人々の意識や価値感に変化を及ぼすか否かに話題を展開させ、グローバルな視点で思考を深化させてくれた。

我々は今まで一部の報道で自国に対して肩身の狭い「負」の報道ばかりを耳にしてきた。しかし、今回の出来事で世界が日本に敬意と尊敬の念を抱いていたことを知らせてくれたのであった。放送に参加してくれた学生諸子も異口同音に日本人の行動を驚異の目で見て^{うかが}いることを窺い知ることができた。

日本人は極限にあつて天も人をも恨むことなく、「結い」と「絆」の精神を大切にしていた民族だったのである。この日本人の自然体はどのようにして形成されたものなのであるか。この島国が歴史的に災害の多いことこそが、勤勉で努力を惜しまない人たちを永い歳月をかけて育んで来たと言えるのかも知れないと思ったことであつた。

「現代の若者は・・・」とは定型句のように耳にする言葉であるが、しかし、今回の災害で各機関の人々の使命感を超えた働き、大^{うち}学、高校生のボランティアは被災者の方々に明日を生きる勇氣として、大きな力となったことは疑いのないことである。この裡なる善意は地震も津波も原発事故さえ、これを消し去り持ち去ることは出

来ないであろう。

しかし、被災地の現実には厳しいものがあつた。大地震、津波、原発事故と一連の未曾有千年近く前にはこれよりも大きな津波があつた痕跡が残されている）の災害は人々を驚愕させ、大きな悲劇をもたらした。漁業に従事している沿岸部の人は海の怖さや不慮の事故には慣れているとは云うものの、今回の出来事は性質を殊にしていた。地震の大きさ、津波の高さ、原子力発電所の炉心の熔融、そこから発せられた放射線の拡散、これらはすべてが老若男女の生死を分けるものであつたのだ。サンデル氏の好意的な会話の導き方には心から敬意を評したいと思う。だが、現地では地獄絵図さながらの現実があつたのである。サンデル氏はその悲劇には意図的に触れないようにし、大局的に抽象論や比喻を多用しながら見事な日本人論を展開して見せた。しかも、そこには日本人の伝統的な精神性を巧みに織り込んでいた。うっかりすると、議論や討論に慣れていない日本人は、外国人は話が上手く慣れているからと見過ごしてしまひそうだが、この有無が日本国が外交に弱いと云われる所以ではないのだろうか。しかも、今度の災害が改めて自分たちが日本人であり、得難い美德の持ち主であることを自覚させてくれた。同時に負の遺

産もチラリと垣間見せることも忘れなかった。サンデル氏はそれを解りやすく世界に発信してくれたのである。あとは読書と同じようにそれを見た人の感じ方、受け取り方に任せるしかない。

生きる原動力とはどうやら衣、食、住だけではないらしい。励ましの言葉や激励が千金に値する場合もある。この番組は被災地の人々も見ていたに違いない。ときおり、被災地のテレビ画面からあふれ出る笑顔からは、やっぱりサンデル氏と同じように、「日本人って素晴らしいなあ」という感慨と、日本という国に生まれて幸せだったという一言に置き換わる。

歴史は今日から明日へ途切れることなく続いて行く。しかし、今日と明日とが違うように、我々にとって借地や間借りに近い地球には、その上で暮らす人々に幸運も不幸せも起りうる。その時に備えて日ごろからの心構え難しいとしても、人間としての心の準備は出るはずである。

サンデル氏の結びの言葉は「徒然草」からの引用であった。「この世はきだめなきこそいみじけれ」の一節であったのである。兼好法師が現世に居たなら、この時、何と云ったか興味は尽きないところである。